

見学し、中国人街なども訪れ、忙しい日々を送ったといわれています。

6月1日にクラーク博士一行はサンフランシスコ・香港航路（途中横浜に寄港するだけ）の汽船グレイト・リパブリック号に乗船し、金門湾口を通過して太平洋に出ました。グレイト・リパブリック号は木造外輪汽船で、長さ386フィート（117メートル）、積載量4,300トン、150人収容の特別二等室と1,200人分の普通客室を備えていましたが、この航海では特別二等室に30人、普通船室には300人程度の中国人が乗っていたといえます。この当時の外輪船では、サンフランシスコと横浜間は22日間ほどかかったそうです。

コラム 旧島松駅通所とクラーク博士

松尾 誠之(本会理事)

札幌農学校の初代教頭クラーク博士が「Boys, be ambitious!」の名言を残して、見送りの学生たちと別れたのは1877（明治10）年4月16日のことでした。この様子を描いた150号の絵画「島松での別離」が北海道庁旧本庁舎に飾られています。描いたのは田中忠雄（1903～1995年）というキリスト教絵画を多く発表している札幌の牧師の家に生まれた画家で、北海道開拓百年を記念して1971年に制作依頼を受けています。

実は名言の後に続く言葉がありそれが「like this old man」（この老人の如く）だといえます。ここから「島松での別離」にまつわる伝説が生まれました。絵の構図の中でクラークの指さした先には別離の地島松で昼食の世話をした中山久蔵と思しき老人が描き込まれており、明治6年に寒冷地稲作に成功を取めた久蔵のことを指して「this old man」と言ったのではないかというものです。

でも、この伝説には無理があります。

- ① 指示代名詞の「this」は近称を示す言葉であり、久蔵を称えたのであれば「that」であるはず。
- ② クラークより2歳年下の男を見た目だけで「old man」と言うのは失礼である。クラーク博士の人格

だが、クラーク博士たちの航海では横浜の少し手前で台風の進路を避けるため迂回し、予定よりも一週間近く余計にかかり、6月28日の夜に横浜港に到着しました。6月29日の朝に横浜に上陸してホテルで休んでいるところに、マサチューセッツ農科大学卒業生の堀誠太郎と開拓使の職員数名が出迎えにきました。堀誠太郎は、東京・札幌での通訳と一行の助手を務めた人物です。そして、その日の午後には、1872年に日本で初めて開通した東京・横浜間の鉄道で東京に向かい、クラーク博士たちの日本での活動が始まったのです。



田中忠雄「島松での別離」（北海道庁旧本庁舎蔵）

からしても自らを老いぼれと謙遜したであろう（当時の50歳は十分老人だった）。

③ 久蔵が駅通の取扱責任者になるのは、1884（明治17）年のことであり、駅通業務の補助をしていた記録は明治13年に初出するが詳細は不明である。

ここからは想像になりますが、画家は絵画制作にあたり多くの資料を読み込んでキリスト教絵画によくあるように寓話性を意図したのではないかと。すなわち大志という言葉に込められるのは金銭的な成功や名声の獲得ではなく、知識や正義や人間性の向上にあるということに尽きるのではないかと思います。その象徴として勤勉を地で示していた久蔵を絵に潜り込ませたのではないかと想像します。

（了）